活 動 成 果 報 告 書

平成２５年度（第１７回）「チヨダ地域保健推進賞」

活動テーマ

保健総合センターでの発達が気になる子どもの
親子グループ「のびのび子育て教室」の取り組み

応募グループ名称及び氏名（グループの場合は代表者名）

東和保健総合センター

代表者：塩崎 敬之

勤務先：足立保健所

所　属：東和保健総合センター

所在地：〒１２０－０００３

東京都足立区東和３－１２－９

ＴＥＬ：０３－３６０６－４１７１

ＦＡＸ：０３－５６９７－６５６１

E-Mail：touwa-hoken@city.adachi.tokyo.jp

◇活動方針　（はじめに）

足立区は人口６６９，５５３人、出生数は５，４９９人。内、東和保健総合センター（以下、当センター）管内の人口は１２７，１９７人、出生数は１，０６１人（平成２４年１０月１日現在）。

当区の１歳６ヶ月児健康診査は、内科健診を医療機関で実施し、歯科健診と親子相談を保健総合センターで行っている。当センターには年間約９００人来所する。健診事業や地域での相談で発達が気になる子どもをもつ親から「子どもが言うことを聞かない、遊び方がわからない。」との訴えが多くなった。そこで平成１７年度より遊びをとおして子どもと関わりを持ち、親の育児不安軽減を目的とした「のびのび子育て教室」を始めた。当センターにおける親子グループの果たしてきた役割を説明する。

◇活動内容と成果　（「のびのび子育て教室」の概要）

対　象　者：健診、相談で発達が気になるといわれた児、親子関係が気になる親子。

紹 介 経 路：①１歳６ヶ月児健診心理相談②２歳児フォロー③地区担当保健師④３歳児健診心理相談

卒業の目安：①３歳半に達した月②心理相談が終了③療育機関へ月３回以上の通所

開 催 回 数：月２回、９：３０～１１：３０　担当者：保健師２名、非常勤保健師１名、保育士１名

内　　　容：自由遊び、プログラム３０分、遊び（粗大運動、微細運動）、母のグループワーク

年６回は足立区障がい福祉センターより専門職員に来てもらい、学習とグループワークを実施。

活 動 成 果 報 告 書

（１） 来所者の状況（平成２４年度）

① 用者：実３１組、延べ２１９組、１回参加者：６から１４組、卒業：１０組（療育機関、幼稚園等）

② 回参加年齢：１歳６ヶ月以上～２歳未満が１５組、２歳以上～３歳未満が１５組、３歳以上が１組

③ 回参加時に母が困っていること（重複あり）

「発語が遅い」27、「落ち着きがない」7、「食事」6、「子への接し方」8、「子に言っていることが伝わらない」4、「集団で遊ぶ経験の不足」4、「こだわりがある」2、「指差ししない」5、「寝ない」4

④事例の紹介

	参加のきっかけ（参加当初の年齢）	参加をしての変化	
		保護者	児
A	父、伯父、祖父と同居している父子家庭。他機関連絡で把握し地区担当保健師が訪問。ことばの遅れ等認めたため紹介。（２歳１１ヶ月）	育児は伯父、祖父が主。児への関わりが薄くなっていた。外遊びや集団で遊ぶ経験もなかった。父が仕事のため、休職中であった伯父が参加。参加当初は何故怒っているのか理解できずイライラしていたが、参加してから関わり方が解かってきたと、児への外出機会を増やしたいと児童館デビューもした。	家族以外との交流が乏しく、当初は緊張が強かった。女性職員や他児の母に関わりを求め甘えた様子。見慣れない糊を舐めるなどの行為もあった。段々と他児への興味や発語も増加。支援児枠で保育園入園後は集団にすぐなじめた。
B	母がことばが出ないことを児童館にて保健師へ相談。当教室の紹介を受ける。（２歳１ヶ月）	児のことばの遅れを「このまま様子を見ていいのか、ハードルは高いけど専門機関に相談すべきか」と悩みを抱え、当初は表情がなく暗かった。徐々に児の成長を実感することで「児が喜び、楽しそう。あいさつやバイバイができるようになり嬉しい。」と表情明るくなる。児の手の過敏さへは対処の工夫が見られる。幼稚園入園を控え不安があったが、児の発達を実感すると軽減した。	初回から教室のプログラム・遊びに参加でき、言語理解もよいが、有意語はなかった。視線とジェスチャーで要求。手の過敏さも見られたが、段々と他児への興味を持ち、他児と遊べるようになった。他児と手をつないで教室に入室することもある。場面での発語は少ない
C	地区担当保健師が母親学級での発言が気になりフォロー。1歳６ヶ月健診にて児との関わり方に悩み心理相談利用し教室を紹介。（１歳９ヶ月）	実家は遠く、夫は単身赴任でストレス強い。児が遊んでいても「手遊びはもう十分でしょ。」と中断させたり、児がかんしゃくを起こしても「どうしたいの？」等問い続けたりするだけだった。徐々に発語が増え関係が取りやすくなるにつれ「子育てが楽になった。この子は触れられるのが嫌みたいだがスキンシップの取り方はどうしたらよいか」等関わりに変化が見られた。	初回から４回は大泣き。体幹に触れられることが苦手でスキンシップの取りにくさがあった。発語はなかった。２歳くらいから段々と発語が増えた。体幹に触れられる緊張が取れてきた。
D	生後４ヶ月から毎月育児相談に来所。1歳６ヶ月健診で児に対する関わり方、自己嫌悪に陥らない考え方を教えてほしいとの相談があり、心理相談を経て参加。（１歳７ヶ月）	「食事が一番困る。イライラをどこにぶつけたらいいか。」と訴え、児へ手を上げてしまうこともあり、自分のしつけの問題か心配していた。教室では親子遊びを傍観する母が多い中、一生懸命児と遊んでいる。教室参加をとおし、育児に対し「まあいいかと思えるようになり楽になってきた。」との発言聞かれる。「児の言っていることが解からないときがあり、子どもが泣いてしまう。どうしてあげたらいいか。」等気持ちを表現し相談できるようになった。	８回目迄は特定のプログラム中泣き続けた。参加を重ねることで段々と切り替えが上手くなり、遊びを楽しめるようになった。他児の様子を見ておもちゃを出してあげたり、絵本の内容を真っ先に答えたりするようになったが、プレ幼稚園ではまだ輪に入れないでいる。

活 動 成 果 報 告 書

（２）「のびのび子育て教室」の成果と役割

「のびのび子育て教室」８年間の成果と役割について事例をとおして説明する。

１）発達が気になる子どもへ多様な遊びを通じて、子どもの持つ特性に、親が気付くよう促すこと。

・事例Ａでは、伯父が児の経験不足に気付き、教室へ積極的に参加、児童館へ外出するようになった。

・事例Ｂでは、子どもの手が過敏であると気付き、母はおにぎりをラップで包み食べさせる工夫をするなど、子の苦手なことは無理強いしない対応ができるようになった。

・事例Ｃでは、子に過敏さがあるためにスキンシップ遊びが苦手な子であると気付き、それまでは「嫌いだからやりたがらない」という認識だった母が「どのように遊んだら良いのか」とポジティブな関わりになった。

２）子どもの発達に伴う親の不安やイライラが軽減するように支援すること。

・事例Ａでは「子どもがしゃべらない、子ども同士で遊べない」と不安があった。教室に継続参加し、徐々に児の変化が見られようになると、伯父の安心と自分の行動への自信につながり、児の様子を見守れるようになった。一緒に参加していた伯父は精神面のバランスを崩し休職していたが、児の教室卒業と共に就職できた。

・事例Ｂでは、１歳６か月健診時の心理相談で一度相談終了となったが、母はその後も言葉の遅れについて不安を抱えており、地区活動の中で保健師が教室を紹介し参加するようになった。プレ幼稚園の利用など子どもの環境変化により不安が増大することがあるが、落ち着いて子育てできるようになった。

・事例Ｃでは、子への関わり方がわからない中で母子二人きりの生活を送っており、この教室が母にとっては子どもにイライラしないで安心できる場となり、母に精神的な安定をもたらした。

・事例Ｄでは、子のかんしゃくや頑固な面に困り叩いてしまうこともあったが、教室参加後は叩くことがなくなった。教室で母の不安やイライラを言語化することで気持ちの整理ができ、違う対応をする余裕に繋がった。

３）支援を要する子どもへ適切な療育や医療などにつながるよう親を支援すること。

事例Ｂでは、心理相談で心配なしと判断されたり、療育の必要性を示唆されたりと方針が揺れている。子どもの発達を見ながら、療育につながるタイミングを計り、母の気持ちに寄り添いフォローする場となっている。

このように「のびのび子育て教室」では、こどもに関わる大人を支援する、学習する場としての役割をもち成果をあげている。

◇今後の計画　（おわりに）

発達が気になる子どもとの接し方がわからずどうしていいか悩み育児不安を抱える大人。教室のなかで遊びをとおして子どもと関わることで、子をかわいい、子育てが楽しいと感じられる体験ができることで、子どもへの接し方が大きく変わる。発達が気になる子どもは適切な療育につながる必要性もあるが、まず、基本的な親子の関係づくりを支援していくことが大事である。子どもは日々変化し、それに伴う育児不安も変化する。その為保健師は、健診場面での関わりで終えるのではなく、地域での活動で親子と関わり、適切な支援につなぐことを大切にしている。「のびのび子育て教室」を活用し、今後も地域の子育て支援を充実させていきたい。

以上